

付 録

中国語教育講演会

中国語初年次教育について

——早稲田大学における試み

〔講演者〕早稲田大学文学学術院教授・中国語教育総合研究所所長

楊 達

はじめに

はじめまして、楊達（よう・たつし）と申します。今、田禾先生からの紹介にもありましたが、私は13歳の時、日本に参りました。最近中国語の受身の表現で、「被高鉄」とか、「被」に名詞を付ける、というのが流行っています。私はどちらかというと、「被来日本」というべきで、親に無理やり連れてこられた、というところがあります。どうして資本主義の国になんか行かなければならないのだ、というのが当時の気持でした（笑）。

私が日本に来たときは、周りに中国人はほとんどいませんでした。街でもしも中国人を見かけたら、懐かしくて、ついつい声をかけてしまうほど、そういう時代でした。日本の外国人受け入れの制度も整っていない時代で、日本の小学校を卒業していないと、中学校に入れませんでした。私は中国ではすでに中学生でしたが、一度日本の小学校に入り直し、それから中学校に入りました。当時、周りに中国人もいなければ、中国語の分かるボランティアの人もいない。いきなり日本語の海に放り出されました。ですから日本語は、「アイウエオ」を覚える前に、話すことを覚えました。そういう珍しい人間です。

ちょうど「臨界期」¹といわれる年齢です。聞いたことがおありでしょうか、人間は面白いもので、あることができるようになると、そのプロセスを忘れるようになっていきます。例えば、歩けるようになると、歩き方を忘れるし、怪我をして2ヶ月ほど歩かないと、リハビリをしなければならなくなる。言葉も同じで、母語を獲得する過程は、今も謎のままです。私はたまたま、13歳という記憶のある段階で、しかも自然言語習得にやや近い形で日本語を学び始めた、というケースです。

これまで経験的にやってきたことが、最近他の分野の研究によって、明らかにされつつあります。本日ここで皆さんに、こんなことをやっている、というのをご報告し、皆さんのご意見をいただきたいと思います。

早稲田大学の中国語教育——コンピュータ学習を中心とするシステム

田先生にいただいたお題は、「中国語初年次教育について——早稲田大学の試み」です。大まかにご説明しますと、まず、2010年までの試みを紹介します。次に、昨年2011年から何をしているかを紹介します。その後、早稲田大学、そして日本の中国語教育の歴史を若干回顧します。それから、新しい試み、コンセプトの内容に入ります。現在早稲田では、簡単なソフトですがコン

ピュータ教育を一つの核にして、それを中心に授業を構成しています。「Dig システム」というもので、これを紹介します。

早稲田大学といっても、学部がたくさんあり、それぞれの学部で中国語教育が異なります。私は、文化構想学部と文学部〔第一・第二文学部を改組し2007年に設置〕のブリッジ科目として中国語教育を担当しています。正式名称は、「基礎外国語 1年中国語」です。

文化構想学部と文学部の全体的なシステムですが、1年生は専門を選びません。そして、英語以外の外国語を一つ履修します。仏・独・中・朝鮮・スペイン・イタリア語から、一つ選択します。週4コマです。理想的なコマ数とっていいと思います。中国語履修者数は460名です。昨年は100人ほどが抽選漏れしました。抽選をする理由は、コンピュータ教室が足りないからです。クラスの人数は、以前は40～50名でしたが、最近はやや少なく、30～39名くらいです。90分授業を、週に4コマです。

教材は、2010年までは『簡明実用漢語課本』（東方書店、1998年）を使っていました。一般教室で使用します。付属のCDは自宅学習用です。そして「Dig 学習システム」、これはパソコン教室で使います。「ノンストップ中国語」は、ラーニング・マネジメント・システムに小テスト機能がありまして、その機能を使った、4択問題で学習する小テストです。これもパソコン教室で使用します。「書いて覚える中国語」は、テキストの文法項目に合わせて、手で書くドリル練習です。1課につき3～40問程度です。

各課の前半はコンピュータ教室、後半は一般教室で学びます。実際のイメージを、映像でご覧いただきましょう。

〔コンピュータ教室の映像〕

パソコン教室の授業は、ちょっと異常な雰囲気です。通常外国語学習というのは、大きな声で朗読する、というイメージがあるのですが、キーを打つ音しか響きません。これが「Dig」というシステムです。教員は個別に指導することもあります。

次が一般教室での授業です。

〔受講生の発音〕

続いて、中国語を選択した動機を聞いています。

〔志望理由を語る受講生〕

1年生で中検3級に合格していますね。先ほどのように授業が進められ、1年生の11月に、中国語検定試験を受けさせています。受験者の5割から7割が3級に合格します。4級は落ちる人がいません。検定に対する効果は出ています。

では、このシステムを導入するまで、どう教えて来たのかについてご説明します。早稲田大学に移る前は、私は成城大学に勤めていました。2000年に早稲田に移って、2001年から、時代の流れということで、実験クラスを設け、コンピュータを少しずつ導入しました。実験クラスは私のクラスで、初級と中級でコンピュータを使い始め、2002年から実験クラスで本格的に導入、2003年から当時11クラスすべてで導入しました。2003年には「ノンストップ中国語」を導入、2004年には Dig + ノンストップという形にしました。

これから見ていくソフト開発は、場合によってはかなり高度なものですが、実は私自身は、ワード、エクセル、それからパワーポイントが使えるくらいです。教授法の研究をするのが私の

仕事です。ソフトの開発は、理工学部の実験室でしていただき、その成果が積み重なり、組み合わせあって、はじめてこのようなことが可能になりました。

クラスの人数は40人くらいです。通常、会話練習はできません。しかしソフトを使えば、特に会話の授業を設けなくても、ある程度会話ができるようになりました。

中国語検定試験の成績——下位で差がつく

この表は、中国語検定の過去問を、はじめてコンピュータ教室を使ったクラスで実験した成績です。6月末の時点で、4級の試験を、予告なしでいきなり受けさせた結果です。各78、76名ほど受けて、合格率はそれぞれ88、86%です。リスニングの成績が高いですね。コンピュータはリスニング中心で、それが私たちのコンセプトです。

成績が面白いのですが、得点順に並べると、通常は最上位と最下位は差がつき、急なカーブになります。ところが、実験クラスでは最下位が高い位置にあり、ゆるやかなカーブで、定着度のいいことが分かります。2003年の成績はもっとよくなりました。受けている段階での学習時間は、65時間です。ご存知かと思いますが、中国語検定は4級で、150～200時間くらいの学習を必要とすると設定されています。早稲田では時間が短縮できた、ということがいえます。

春に始め、夏に試験を受けてもらい、結果がよかったので、冬に3級を受けてもらいました。うちの実験クラス以外に、パソコンを使わないクラスの学生にも受けてもらいました。結果、パソコン授業を受けた学生の方が、未実施のクラスに比べて、予想通り高くなりました。

注目していただきたいのは、クラスには優秀な学生が必ず一人はいることです。その子はどんな教え方でも上達します。上位の差はつきません。ところが、下位は差がつきます。コンピュータの効果が高いのはここです。授業で終わらなかった人は、空き時間に学習が可能なんですね。追いつけます。ところが、コンピュータでない授業は、先生が教室からいなくなったらもう終わり。これが大きな差だと思われまます。

両者は母数も違ってきます。脱落者が出たわけですから。年末になると、私は中国語に向いていない、という人は来なくなる。私のクラスの場合も、コンピュータを使わないところは、毎年3人脱落者がいました。しかたない面もありますね、スポーツや演劇をやる青春もありますから、来年がんばれ、と（笑）。でも、パソコンを使うようになってから、脱落者は1人もいません。野球部の4番打者もいました。授業に来られなくてもタスクを指示できるので、ぎりぎり合格点をとってくれます。

素質の差、教員の教え方の差というのがありますね。パソコン授業でないクラスからは、中国語中国文学専修に、40人中10人来ました。モチベーションの高いクラスです。私のクラスは2人ずつくらい。ですから、パソコン授業でないクラスも、モチベーションが低いわけでもなく、素質がないわけでもない。ただ道具の違いでこの差が出るのではないかと、思っています。なぜこうなるのか、証明の方法は分かりません。主観的な部分があり、学術的な発表をするにはまだまだ不成熟です。

コンピュータ学習のメリットと課題

では、なぜできるようになったのかですが、まずリスニング力がつきました。それから強調し

たいのは、ピンインなしで漢字が読める点です。当たり前のように思われるかもしれませんが、多くの大学では、それは難しいでしょう。ピンインをつけない中級教科書は売れない、と言われます。逆に私どもでは、中級の教科書に困っています。すごくいい題材の教科書がたくさんありますが、全部ピンインがついている。それを採用できない。

また、相対的に会話力が身につきました。あくまで相対的です。昔は質問でも、例えば「是」について、「「これ」って何ですか?」と質問してきました。コンピュータを使うようになってからは、「“shi” って何ですか?」、「“de” って何ですか?」と質問してくるようになりました。この変化は、小さなことですが、とても嬉しかったです。会話では、ネイティブのナチュラルスピードで話しかけても、反応してくれます。

残された課題もたくさんあります。まずは、教科書の内容が時代遅れです。ややもすれば、「人民公社」が出てくるような教科書でした。私が早稲田に入ったころは、「人民公社」や「雷鋒」²などが出てくる教科書でした。『实用漢語課本』は、改革開放まもないころ、研究者たちが一生懸命作ったもので、非常に有名な教科書ですね。最後の方は、「周恩来総理が花の中で微笑している」といったフレーズで、時代遅れでした。われわれの感覚として、1年生の前期は盛り上がるんですが、後期になると中国の古いイメージが出てきて、動機づけがマイナスになります。それで、教科書を書き換えなければならなくなりました。

次に、Digとノンストップ中国語、2つありますが、どうしても授業内に終わるのが精いっぱいです。書く練習を、コンピュータの直後にやってほしい。コンピュータは「短期記憶」のくり返しですので、「長期記憶」に行くには、最後は手で書かなければならない。私たちも覚えるときに、書こうとしますね。あの行為はどうしても必要だから、私たちもそうしているわけです。練習をしたいのですが、時間が足りない。教科書が後半になると長くなって、使用するタイミングの難しいことがあります。それで、2010年から本格的な教材開発に着手しました。

早稲田大学における中国語教育の歴史——「オーディオリンガル・メソッド」

ただその前に、早稲田の今までの中国語教育が、どのように発展してきたかというのを、考えねばなりません。早稲田の中国語教育の歴史はどうかというと、いろんな問題が絡んできます。現在私は中国語教育の授業も担当していますが、明治以来、近代日本になってから、中国語学習の動機づけは、実は現在と近いです。つまり、道具的な動機づけ、です。当時は不幸なことに、戦争という動機づけもありました。今は企業が中国に進出するから、将来就職する時に役に立つだろう、と考えて履修する学生はかなりいます。

そのときに、やはり会話ができない、という問題があって、戦前から取り組まれています。有名なのは、倉石武二郎先生が、漢字抜き、ローマ字で教えるということをされました³。つい数年前まで、東京の日中学院で、その教え方がされてきました。ですがこれには弊害があります。それを習った先生から聞いたのですが、「話せるようになったが、『人民日報』が読めない」という問題です。日本人ですから、もともと漢字を知っている、のに読めない、ということが逆に生じます。漢字をやると会話ができない、会話をやると漢字が読めない、というジレンマがありました。

早稲田の中国語教育の、当時の成果としては、まず、「目」優先の理解を改善できたこと。も

う一つは、「わかる、から、できる」を達成できた、ということがあります。ただ、課題としては、会話はできるが、『人民日報』は読めない、耳と目でうまく体系的に把握することができない、ということがありました。個別のルートになっていたということです。

早稲田の中国語教育の基礎を作ったのは、長谷川良一先生です⁴。中国語教育の大家です。今、80歳台半ばです。長谷川先生から直接聞いた話では、最初倉石先生に師事し、次に、「オーディオリング・メソッド」に出会いました。これはいいと、倉石先生が出張中に、2週間ほどこっそり取り入れてみたら、非常に効果がありました。倉石先生に報告し、ぜひこの方法をやらせて下さい、と訴えたそうですが、当時は許可は出なかったらしいです。

長谷川先生は、たまたまそのころ早稲田に就職したので、オーディオリング・メソッドで早稲田の中国語教育を構築します。それは現在でも受け継がれている、と私は思っています。私は早稲田大学に入学し、中国語教育をしたいと、早稲田の大学院に進学したのですが、長谷川先生から、教えることはない、と言われました。授業を見学に行きました。そして、私の意識が軽薄だったことに気づかされました。当時1クラスは59名まででしたが、全員5回くらい当たります。ものすごいリズムで進みます。非常な緊張感があり、毎回必ず誰かが泣いていました。発音できないときは口の中に手を入れます、こうですよ、と（笑）。小さい鏡が必携で、自分の口を見ながら発音練習。でも、欠席者は一人もいませんでした、これがすごいですね。あのメソッドを日本中に広げるべきだったのですが、それはなかなか難しかった。

中国語教育の改革——Dig と記憶のしくみ

これらを振り返りながら、どう改革すればいいのかですが、現在専修に7名の専任教員がいます。相談した上で、Digを前提とした教材開発で行こう、となりました。ウェブ教材の特徴を生かして、少人数クラスのカリキュラムを試みてみよう。あとは、統一テストの充実ですね。今はコンピュータによる統一テストを行っています。そして、新しいデバイスによるDigシステムの推進です。

コンセプトとしては、1つの課を4つのステップに分けます。「3入1出」の4部構成です。3回インプット、4回目はアウトプットです。ステップ1はDigのドリル、ステップ2は一般教室でナチュラルスピードの音声を流します。ステップ3はまたDig。そしてステップ4は長文学習です。

先ほどから申しておりますDigですが、なぜそんなにDigを用いるかという、この実験の映像をご覧ください。

〔中国語を用いて質問に答える学生の映像〕

これは、初めて作ったソフトで学んでもらった学生です。会話のテストです。

〔中国語の質問と回答がつづく〕

まだまだ片言ですよ。発音もまだ定着していない。文法も間違っています。一方、インタビューする私がしゃべっているのは、自然な速さですね。これに学生が反応しているのが、大きな収穫です。

彼は早稲田大学理工学部の修士課程の学生です。2002年、ソフトと一緒に開発していたので、記憶が定着しそうだね、面白そうだねということで、約束して勉強してもらいました。彼が学習

した時間は14時間くらい。教員の指導は2時間半くらいです。83パーセントは自分で勉強しています。14時間ですから、3日間ほど集中すれば、これくらいやれそうな気がしますね、実際には難しいでしょうが。

私が面白いと思ったのは、彼の場合、学習期間に2週間空白があります。にもかかわらず、ここまで話せるようになったことです。1週間やったら、ビデオを撮りましょう、と約束していたのですが、お互い用事があって、会うのが難しく、指導ができなかった。なぜこんなに間が空いているのに、覚えているのかということに、驚きました。通常は、2日間集中的に学習しても、2週間空いたら、忘れてしまうものです。

最近、認知心理学を勉強しています。その中に、記憶のメカニズムというものがあり、Digは偶然それに当てはまる場所があった、と考えています。

人間には、分かりやすくとえますと、「感覚記憶」、「短期記憶」、「長期記憶」があるそうです。「感覚記憶」とは、皆さん目を閉じてみて下さい。教室の風景が残っているはずですが、あっという間に消えてしまいますね。これが感覚記憶です。耳の感覚記憶は5秒ほどもちますが、目の感覚記憶は1秒もたない、といいます。その中で、注意という行為を行い、必要な情報だけ抽出し、「短期記憶」に送り込んで、解析し、そして「長期記憶」に行きます。

記銘行為に関する研究を見ますと、実は短期記憶の中で、「リハーサル」と「コーディング」をすることで、時間を長く保つことができるそうです。長く保てると、長期記憶に入る可能性が大きいというのが、認知科学の一般書からも分かります。「コーディング」とは、イメージ、映像を浮かべることで記憶できる、という学習法ですね。「リハーサル」は、例えば手帳を見ながら電話するとき、番号を口ずさんだりすることで、短期記憶に残そうとする行為です。普通は電話を切ると忘れますね。これによって、長期記憶への転送の確率が高まるわけです。

「聴覚イメージ」の形成

Digはどうなっているかご説明します。全部で7つのステップがあります。1、2、4はとても簡単な練習で、クリックするだけです。これが感覚記憶の練習に当たります。一方、3、5、6が短期記憶で、リハーサル効果を狙います。それによって長期記憶に送り込まれているのでは、と考えます。これらの効果で、彼は長く記憶できたのではないかと、今になって想像できます。当時は全然分かりませんでした。

今考えられるのは、Digのシステムは偶然にして、感覚記憶から短期記憶へ、短期記憶から長期記憶へと、1つずつ転送しているシステムとなっていた、ということです。記憶庫へと投げ込んだ情報を、リハーサルによってすみやかに「検索」できるようになる。大学受験などで、一生懸命に手で書いて覚えたのに、会場では緊張して出てこない。ところが帰り道で、電車で揺られていると思出す、ということがありますね。これはどういうことかということ、「記銘」するには成功したが、「検索」に失敗した、ということです。だから、私たちはもしかすると、記憶させることに一生懸命で、検索することを意識してこなかったのではないか、と思われまます。

もう一つ面白かったのは、彼の適当に話したことが、私たちにも辛うじて聞き取れますね。通常は、声調を間違えたら聞き取れません。私は授業でとても声調にうるさくて、間違えると立たせたりします。皆さんもご存知かと思いますが、「聴覚イメージ」というものがあります。この

聴覚イメージが重要ではないかと思っています。

では「聴覚イメージ」とは何かというと、目標言語環境にいる子どもが、言語習得の初期に、「沈黙期間」を経る、という報告があります。その期間、子どもは目標音声の「聴覚イメージ」を作り上げている、といわれます。

海外へ赴任する一流商社マンがいて、子どもが小学校2年生、としましょう。ニューヨークに行ったら、半年後、子どもの英語はネイティブと変わらない英語になっていた。一方、お父さんは相変わらず、普通の英語です（笑）。お父さんは大学も通って、いろんな知識を持っている。にもかかわらず、発音はネイティブのようには変わらない。それはなぜかということ、成人学習者にとって母語話者に近い発音の習得が難しいのは、まだ十分に目標言語音の聴覚イメージが形成されていない段階で、発音練習を開始したからです。母語の干渉を受ける自分自身の発音が、聴覚イメージの形成を妨げているのです。

大人は、例えば商社マンですと、学んだものをすぐ使わなければなりません。社会的なプレッシャーがあります。一方子どもは、そのプレッシャーがありません。なぜ断言できるかということ、これは私自身の経験です（笑）。昔、日本に来た私は、一年ぐらい経つと、けっこうごまかせる程度には日本語が話せるようになりました。よく聞けば、ちょっと違うところはありますが、当時でもよく聞かなければ、普通の日本語かな、というくらいに話せるようになりました。

そこでよく質問されたのは、あなたはどのくらいで話せるようになりましたか、ということですが。全然覚えてないんです。ある日突然、話せるようになりました。ただその時は、聞き取れるようになったのは半年、話せるようになったのは一年、と答えました。

今になって、分かった、といえるのは、私は普通の下町の中学に入れられました。みんなやさしくて、いじめもなく、非常にいい環境で育ちました。今でも覚えているのは、国語の授業で、順番に読んでいきます。私の番になると、「楊くん、一字でいいから読んでみて」と言われました。許してもらえるし、私も恥ずかしいから、友だちと話もしない。社会的なプレッシャーがないんですね。だから、ひたすら毎日人の話を聞いていました。あるとき、何か緊急事態が起きました。何なのかは分からない。その時、ふっと話しました。で、話せるじゃないか、と一瞬に気づきました。

他にも実例を挙げましょう。4歳くらいの男の子の母親が、子どもが話せないと非常に心配し、脳に障害があるのでは、病院に相談に行こう、と考えていたら、子どもが、「お母さん、夕日ってきれいだね」と一言いきました。つまり子どもは、聴覚イメージが形成されるまでは、貯めているんです。貯めることが大切です。正しくはないですが譬えますと、貯めたら鏡みたいなものができるのではないかと考えます。聴覚イメージができると、自分が発話したものが分かるようになる。自分で調音できるわけです。子どもが周りの大人から修正されることなく、徐々に正しい発音へと変化していくのは、こういったメカニズムがあるからだと思います。

だから、早稲田大学では過度な発音練習はしないことにしています。あまり発音しない、極端な話、1回も発音しない。成果はそんなに理想的ではないですが、3、4年生になると、上手い学生は非常に上手いです。最近、ネイティブに褒められるような学生が出ているので、基礎づくりにはよかったのかもしれないと思います。

Dig と「コミュニケーション・アプローチ」

早稲田大学の中国語教育について、教え方には3つの概念があります。一つは、アプローチ、考え方ですね。特定の言語観や言語学理論に基づいて、考え方の根拠を示す教授法理論。もう一つは、メソッド。ある教授法理論にもとづく指導法です。そして三つ目が、テクニックです。教授法を教室で実行するための具体的な手順です。

早稲田でいいますと、アプローチは、「構造言語学」、「行動心理学」です。メソッドは、構造重視型シラバスと、模倣のくり返し。テクニックは、置き換え練習と応答練習です。昔『新中国語』という教材がありましたが、ほんとに基本練習です。『実用漢語課本』も基本練習。コンピュータを導入する前は、大きなテープレコーダーを使って再生し、基本練習をやりました。これが長谷川先生の発明した方法です。

改革のコンセプトでは、Digを中心に位置づけて、従来のパターン練習の量を増やす。「3入1出」で、大量のリスニング・ドリルによって、聴覚イメージの構築を目指す。それによって、「コミュニケーション・アプローチ (Communicative Approach)」の教授法が実現できる環境を整える⁵。私自身教えていて矛盾を感じることがあります。コミュニケーション・アプローチも実際にやったことがあります。ただ、発音が安定しないうちにやると、悪い癖が定着してしまう。「化石化」といいます。これではいけない、と戻った経緯があります。聴覚イメージの基礎づくりをし、それができたらコミュニケーション・アプローチを行う。先にやると負の部分が出てしまう、ということです。

新しいカリキュラムの構想では、少人数クラスを試みています。先ほど、早稲田はオーディオリンガル・メソッドを用いていると申しましたが、この教授法についてはすでに60年代から批判がありました。その後、「サイレント・ウェイ (Silent Way)」、「コミュニティ・ランゲージ・ラーニング (CLL, Community Language Learning)」など、新しい方法が出ています。それも分かっているのですが、まだ実施するには早いと考えます。近い将来、コミュニケーション・アプローチにたどり着きたいと思っています。授業で課題を出して、個人で、あるいはグループで何かしたりする。その代わり、単純な練習は学校ではやらない、という方法をとれば実現できます。

今までは、コンピュータも教科書も、すべて教室でやっていました。今後は、インターネット上で、自宅でやってください、とする。学校ではやらない、文法の説明もしません。分からないところは授業で聞いて下さい、というスタンスです。授業では、コミュニケーションな練習をします。今日は買い物の練習をします、あなたは店の店員の役、あなたは何々、いくらで何々を買いなさいとか、そういう風に課題を与えて練習をさせたい。悪い発音が定着しないよう、事前にドリルをやってくることで、そういう練習が可能になります。

コミュニケーション・アプローチを2004年に、実際にやってみました。40人のクラスを4つに分けて、週4コマを週2コマ、1コマ45分の授業にすれば、先生を増員せずに少人数クラスが実現できます。最後に統一試験を受けたところ、他のクラスと異なる教材を使いましたが、成績は大きな差はありませんでした。

〔少人数クラスの授業の映像〕

こんな少人数の教え方ができれば、ということですね。コンピュータを導入すると、機械的な部分はコンピュータに任せて、人にしかできないことを人が集中的にやることができます。中国

の武漢で開催された「Eラーニング学会」で、ある先生が言っていました、「コンピュータのIQはゼロです。絶対いい先生になりません。でも、いい助手になります」。私もこのコンセプトに賛成ですね。助手のやるべきことはコンピュータに任せる。われわれ教員は、授業に集中できる。ただし、この授業をするとかなり疲れますね、学生に暗記させる時間などはありません、つねに集中しなければならないからです。

少人数クラスでアンケートを取りました。この調査の目的は、学生の求めるスキルを、私たちが与えられたかどうかを知るためです。1クラスの場合は、話す力を求めていたが、身についたのは、読む力でした。で、6クラスの場合は、話す力を身に着けたかったが、聞く力が身についた。次に、この実験授業をどう思いましたか、と聞いています。「どちらでもない」が4人で、あとはすべて「よい」以上です。1人、「あまりよくなかった」という人もいますね。

次に、どこでオンデマンドを利用したかですが、このときは大学となっていますが、今は自宅になるでしょう。何時間前に与えられた課題を終わらせたかですが、24時間前が多かったですね。5時間前くらい、直前にやる学生も多いですね。実は今、タブレット型の開発をしています。完成すれば、電車の中など、直前でもできます。対面授業については、人数はちょうどいい、という人が多く、授業時間は、ちょっと短く感じる人が多い。45分は先生にとっても短いですね、ウォーミングアップしたらもう終わる、という感じです。

もしこのような授業をやるとしたらどう思いますか、ですが、またやりたいという人が多い。この授業をよくないと答えた学生ですが、「厳しく授業を進めてくださり、大変力がついたと自負していますし、その点は感謝しています。しかし、中国語に時間を取られすぎて、本当にやりたいことに時間を割くことができずに前期が終わってしまいました」と書いています。いいことじゃないか、と思いますが（笑）。

コンピュータ教室とスマートフォンの利用

コンピュータ教室は、早稲田の文学部には5つあります。多い方かと思いますが、1教室入れるのに4000万円ほど、維持する技術者1人に1年間で800万円ほどかかります。コンピュータ教室は役に立つけど、現実的には難しい、という理由ですね。それを実現するにはどうすればいいか、今考えているのが、iPadとかアンドロイドとか、スマートフォンを用いることで、1教室100万円で済むかもしれない。学生全員に持たせれば安く済みます。今開発しているものを一つお見せします。

〔タブレット型を使っている映像〕

タブレット型のDigです。自分でドリルをしています。コンピュータ教室で授業するのは難しいですね、ディスプレイで顔が隠れて、何をしているか分からないんですよ。距離もすごく遠くて、話すこともできない。タブレットなら普通の教室でできるし、顔が見えます。まだこれは試作品です。

現在いくつか進めています。先生が画面を切り替えると、学生の画面も自動的に切り替わるとか、教科書の何ページと指定できたり、画を見ながら会話できたり。学生にとって困る開発もしています。bluetoothを通して、定期的に電波を飛ばして、教室にいるかどうか確認します。代返できません（笑）。

最後に、他の大学と比較しています。どのくらい成果があったのかですが、何ともいえません。早稲田の文学部は週4コマ、通常の大学は週2コマです。だから、他大の2年生と比較しました。すると、リスニングは早稲田がいいですが、文法は逆に若干落ちます。合計点に関しても、若干落ちている。ですが、2年生になると、早稲田は1コマとればいい、1コマで必修単位は終わるのですが、2年生同士を比べれば、早稲田はよくできています。さらに、今学生が卒論にまとめていますが、早稲田はモチベーションが高いことが分かります。他の大学と比べると、数値がずいぶん違います。

一方的にお話ししました、自慢のようなところもあって、非常にやりにくかったんですが、ご質問、ご指摘ありましたら、ぜひどうぞよろしく願いいたします。

〈付記〉

本講演は、2012年11月24日（土）、14時から17まで、本学F号館F201教室にて行われたものである。司会は田禾〔本学経済学部准教授〕、記録は大東和重〔本学法学部准教授〕が担当した。なお紙幅の関係で質疑応答は省略した。

〔注〕

- 1 臨界期：その年齢を過ぎると、特定の機能の習得が困難になるとされる時期。言語の場合、一般に思春期（12歳～15歳前後）を指す。
- 2 雷鋒（1940-62年）：解放軍の兵士。1962年に殉職すると、偉大なる共産主義の戦士である「雷鋒同志に学べ」という運動が全国的に展開された。
- 3 倉石武四郎（1897-1975年）：中国語・中国文学者。京都大学・東京大学で教える。日中学院を主宰し、『岩波中国語辞典』（岩波書店、1963年）を編集した。
- 4 長谷川良一（1926年-）：中国語・中国語教育学者。早稲田大学で教える。
- 5 コミュニカティブ・アプローチ：文法能力の育成のみを目的とするのではなく、外国語を用いて実際にコミュニケーションする能力を養成することを目的とする教授法。